

## 足踏み込めば聞く不思議の扉

森を歩く。すがすがしい風が頬をなでる。静けさの中から時折響く、小鳥のさえずりが心を和ませる。森で癒やされるという人は多いだろ

う。ところが森に出かける時、わたしには別の意識が働く。薄暗い闇に潜む何物かの気配に気づくことがある。木立の奥に映し出される見慣れない影。聞き慣れない物音。好奇心をくすぐるそれらの正体を確かめたい。森は癒やしの場だけではない。謎に満ちた探検の舞台もあるのだ。

本書には森の冒険譚がてんこ盛りだ。ボルネオ、ソロモ

ン諸島、パプアニューギニア、小笠原諸島から生駒山まで。大学探検部出身の森林ジャーナリストが不思議体験を

次々と披露する。幻の民「森のブナン」との出会い、精霊体验や怪獣探し。小笠原で未発見の洞窟を見つけたかと思えば、住み慣れたはずの奈良の生駒山であつたり遭難する。次に何が起こるかがわかる。それが人知を超えた

森の奥行きを伝える。読み進むうちに人間と森の関係について考えさせられた。しかし足を踏み込めば、森は不思議の扉を開く。失われたから伝説が消えたのは、生活の場でなくなってしまったからだ。

「いつそ科学と不思議を方ラガラボンした方が、本当の森の姿を示せる」

森の見方が変わり、行くのがまた楽しくなる。

(新星社、1728円)



田中 淳夫著

かせる。本書の読みどころは、われわれが忘れた森との森羅万象へのオマージュにある。著者が最後につづった都市伝説などの迷信は消えられない。それが人知を超えた

ことなく息づいている。森

から伝説が消えたのは、生活

たはずの伝説のかけらをのぞ

森の姿を示せる」

がまた楽しくなる。

がまた楽しくなる。